

B5頁	場-No.	役名	台詞	
3-5	3-78	Sylvia	ちがうの、あなたが仕事をしてるときに考えるの。昼間、ここにいて。 この部屋に座って、お茶を飲んだりラジオを聴いたりしながら、仕事をしてるあなたのことを考えるの。あなたは茶色のスーツで、大きなアパートの部屋のすみにいる、お客さんは部屋を見て回ってる。そしてあなたは大きなドアに全部鍵をかけて、とぼとぼと会社に戻る。	7/2
	3-81	Philip	なんて妙なことを言うんだ、そんなおかしなこと。	7/2
	3-84	Sylvia	だから考えたのあなたのことを、 そして何があなたを幸せにするのか。	7/2
3-6	3-105	Sylvia	お願いだから。	7/2
3-7	3-106	Philip	疲れてる。明日も一日忙しいし。	7/2
	3-107	Sylvia	お願い、待って。すこしだけ。	7/2
	3-108	Philip	七時には起きないと。	7/2
	3-160	Sylvia	まるで重いインフルエンザ	7/2
3-10	3-161	Philip	ほかに話したいことは？ もう行ってもいいかな？	7/2
	3-162	Sylvia	無理に引き留めたつもりはなかった。	7/2
	3-163	Philip	いてくれて君が頼んだんだ。どう見ても躍起になってた、その奇天烈で、奇妙な考えを伝えようと、それがすんだかどうか僕は単純に訊いてるだけだ。	7/2
4-1	4-7	Sylvia	マリオが空港に着いたとこなの。これからデート。それからお泊まり。いかにもだけど、さみしかったから。	7/2
4-3	4-25	Sylvia	ごめん、おへその下でブルブル言ってる。	7/2
4-4	4-40	Oliver	いかにもハーレクイン・ロマンス。	7/2
4-5	4-56	Oliver	べつに会話とかしない。そいつの世界観認めたりしない。おっしゃるとおりホロコーストなんてなかったよね、とか言わない。しゃぶってやるだけ、 そいつに投票するわけじゃない。	7/2
	4-57	Sylvia	全面的にフィリップの味方だね。	7/2
	4-58	Oliver	とにかくさ、あんたがいま選んだシナリオは最悪。変なマニアとか赤ん坊殺しとか。何でもいいけど。そんなの例外だよ。だって、男のほとんどは、サウナとかにいる男のほとんどは、あんたや僕と変わらない。だいたいなんでファシスト・マニア選ぶかな？ ピアニストで、お金を全部セーブ・ザ・チルドレンに寄付してる人かもしれないじゃん？	7/2
4-7	4-94	Oliver	昔ゲイ雑誌の文通欄を見てたのね。ずっと昔。フィリップより前。そしたら一人目に留まってさ。こんな感じの——「ゲイ、三十三歳、ノンスモーカー、趣味はボンデージ、疑似レイプ、レザー、ラバー、チェーン、リミング、フェルチング。恋人募集中。それが僕の人生。	7/2
4-9	4-115	Oliver	洗んじやう。	7/2
	4-116	Sylvia	「洗んじやう」？	7/2
4-11	4-153	Oliver	べつに朝目が覚めたら敬虔なクリスチャンとかムスリムとかそういうものになってやるっていうんじゃない。いきなり頭ツルツルにしてお経唱えたりしない。だけど何かが必要なんだよ、何かの悟りが。だってさもないと、ほんと、サイテー、こんなのもたない。	7/2
4-12	4-154	Sylvia	何が？	7/2
	4-168	Oliver	ありがとう。ありがとう。ありがとう。	7/2
	4-169	Sylvia	わたしにはわからない、なんで。どういうわけで	7/2
	4-170	Oliver	ほんとにありがとう。	7/2
	4-171	Sylvia	——あんたは抜け出せないのか	7/2
	5-3	Philip	ずぶ濡れじゃないか。	7/2
5-1	5-4	Oliver	うん。	7/2
	5-5	Oliver	来るつもりはなかった。僕たち……	7/2
	5-10	Philip	三人で決めたんだ、こんなことよくないって。	7/2
	5-12	Philip	ずぶ濡れじゃないか。	7/2
	5-13	Oliver	ぼうっとしてて。	7/2
	5-14	Philip	びしょびしょだ。	7/2
	5-15	Oliver	図書館に傘を忘れて。	7/2
	5-21	Oliver	君に話さなきゃいけないんだ、フィリップ。	7/2
	5-22	Philip	まだ言うことがあるとは知らなかった。	7/2
	5-2	5-26	Oliver	僕はどうしても……
5-27		Philip	何？	7/2
5-28		Oliver	何でもない。僕は思ったんだ……できれば……	7/2
5-29		Philip	できれば何？	7/2
				聞。

5-3	5-34	Oliver	僕は人生ずっと待っていた、何かの確証を、自分は一人じゃないっていう。	7/2
	5-35	Philip	そう。	7/2
	5-36	Oliver	それが見つかれば、その確証が見つかれば、二度と……僕は二度と——僕は来なきゃならなかった。君に会いに。ごめん。	7/2
	5-37	Philip	勘弁してくれ。	7/2
5-4	5-47	Philip	二人で決めたんだ。君は……僕はお願いした、そんな話はしないでくれて。	7/2
5-5	5-69	Oliver	二人でいるとき。二人で会うたび。そのたびいつも。話をするとき。	7/2
	5-70	Philip	もう終わったことだ。	7/2
	5-71	Oliver	それ以上のものだって気づいた。徐々にわかった……	7/2
	5-72	Philip	勘弁してくれよ……	7/2
5-6	5-73	Oliver	二人の人間のあいだに起きることは神聖なものにもなるんだって。そしてかけがえのないものに。その二人の人間が誰であるかは問題じゃない。	7/2
			間。	7/2
	5-80	Philip	聞きたくない。	7/2
5-7	5-89	Oliver	僕は思った、ああいう男たちのなかには、君も見ればわかるはずだ、ああいう男たちのなかには、あの薄暗がりやを徘徊して待ってる男たちのなかには、選んでやってる人間もいる、たぶんたいていはやりたくてやってる、だけどそれは知らないからだ、どこで……どうすれば見つかるか、しかも自分はしょせんそういう人間だって言われているから、自分は暗がりやに立って誰かに触るのを、べつの男の肌に触るのを待ってる人間だって、だから自分はそれだけの人間だと思ひ込んで、だけど彼らが求めているのは、彼らが本当に求めているのはそれ以上のもの、僕らがいま手にしようと思えばできるもの……だからとの深いつながりなんだ、せめてそこにしがみつこうと出来たら。	7/2
	5-94	Philip	でも僕はそうは感じない、オリヴァー。	7/2
	5-95	Oliver	本当に？	7/2
	5-96	Philip	そうだ、オリヴァー。僕はちがう。僕はちがう。僕はちがう。	7/2
			間。	7/2
5-8	5-97	Philip	なあ、オリヴァー、僕はシルヴィアを愛してる。シルヴィアも僕を愛してる。僕らは夫婦でお互い愛し合っている。これまでのことは……つまり僕らのあいだに、君と僕のあいだに、オリヴァー、僕ら二人のあいだに起きたことは単なる過ちだった。君が何と呼ぼうとかまわない。一瞬の弱さ。弱さ。それだけだ。	7/2
	5-99	Philip	いろいろ言ったかもしれない、オリヴァー、でも残念ながらきつと本気じゃなかったんだ。だって、僕は正気じゃなかった。取りつかれたようだった。ただわかってほしい、僕は君のことを悪く思っていない。うらみもない、悪意もない。愛情だってある。君はまともな男だって信じてる。僕をそそのかしたとも、誘惑したとも、悪気があったとも思わない。僕にだって責任はある。二人ともが過ちを犯したんだ。それだけ。君の幸せを祈ってる、オリヴァー。でも何が起きたかを思い出すと……正気を取り戻したいまになって、僕らのあいだに何が起きたか、僕ら二人のあいだに起きたいろんなことを思い出すと、恥じる気持ちでいっぱいになる。吐き気がする。	7/2
	5-103	Philip	もちろん、友人として思ってくれるのはいい。それは僕も同じだ。君を好きになって尊敬するのはいい、尊敬しようとするのは、友人として。でもそうじゃなくて……君がさっき話していたこと……そういう場所、そういう連中。	7/2
	5-105	Philip	そういう場所……さっき雄弁に語ってくれた場所。そいつらは僕とはちがうし僕もそいつらとはちがう。僕に正直になれと言うなら、オリヴァー、正直に真実を言えってことなら、あいつらには身の毛がよだつ。言はずじゃない。君には正直に言わせてもらおう。あわれだとは思うけど身の毛がよだつ。見たことはあるよ……実際よく見る。気づいてる。人ごみでもバスでも通りでも、僕は吐き気がする。あいつらの歩き方、人を見る目つき、みんないっしょだ。僕はあいつらとはちがう、オリヴァー。そして君もきつとちがう。だからお互いこのことは水に流さないで。それがいい。絶対にそれがいい。	7/2
5-9	5-107	Philip	いつの日か感謝してくれるだろう。理解してくれるだろう。これはある意味、君を守るためだってことを。君自身から。君はきつと理解する。僕なりの妙なやり方だけど、これは僕から君への贈りものだ。別れの贈りもの。	7/2
5-11	5-129	Oliver	だから、その夢を見るようになったのはいつだろう？ 十七歳、十八歳、いつ？ もしかすると大人の男になろうとしていたころ。自分自身を見つけたころ。自分が本当は誰なのか、人生に何を求めているのか。大平原、君は思った。アフリカの大平原。悪い場所じゃない。そこに君が見える。この国は狭い。君にはもっと広い場所が必要だ。深呼吸できる場所。だから君は旅立つ。僕には見える。ブライトンより遠くへは行ったことがないって言っていたけれど、僕には見える、君ははるかかたにいる。冷たい海峡を渡り、地中海を渡り、夢見たアフリカの大地に立ってる。そこで何をしてる？ 農業？ 狩り？ 教師？ きつとそんなことはどうでもいい。そういう場所で、そういう空の下で君はどうとう発見する、自分は何のためにそこにいるのか。ひとりになってはじめて。	7/2
5-13	5-163	Philip	ごめん、ごめん、ごめん。	7/2
5-14	5-168	Philip	いいじゃないか。いま、ここで。こうなることが望みなんだろう？ 僕にこうなってほしいんだらう？	7/2
7-2	7-27	Sylvia	きつとフィリップは、わたしがすっかり狂ってしまったと思ってる。	7/2
			間。	7/2
	7-40	Sylvia	なにか疑いをもつことがある。そんなとき人は忘れようとする。どこかでわかってはいても、認めてしまうと人生がうそになってしまう。すると……	7/2
	7-41	Oliver	すると……	7/2

7-4	7-42	Sylvia	するとずっと頼りにしていた土台が、歩いていた地面、自分のために建てた家、何もかも、壁も家具も吸ってる空気も何もかも、現実とは思えなくなる。そうして真実にまぎれたらそを見分けられなくなる。少なくとも真実ではないとわかっているものを。見せかけのものを。人生はおそろしい仮面舞踏会のようになる。そのことに耐えられなくなる。	7/2
	8-3	Sylvia	ったく。	7/2
	8-4	Oliver	そっちのほうがいい。	7/2
8-1	8-16	Oliver	僕のフェアウェル・ツアー。言ってみりゃ差し入れ。大勢いるファンの一人から。でもダークな趣味の持ち主でさ。あんたって予言の天才だね、ミス・ノストラダムス。何覚に投票してるやつか知らないけど、なんちゃってリベラルですらない。原始人、そう呼ぶのが正しい。ピンストライプのスーツ着て髭も剃ってるけど、絶対そう。あんなびかびかのレースアップ・シューズ見たことないよ。いまだき見た目じゃわかんねーわ。ほら穴から這い出したばかりには見えない。汗のにおいはぎりぎり感知したけど、まるやかなアタア・ディ・ジオの香りに紛れて。	7/2
8-6	8-92	Sylvia	どうなの？	7/2
	8-93	Oliver	ちょうど眠りに落ちるとき、夢が始まる直前。それかたぶん目覚めた直後、目はひらいてるけど、意識はまだ夢のなかにいるとき。	7/2
	8-94	Sylvia	何？	7/2
	8-97	Oliver	そういうとき感じるんだよね、たった一つ大事なことは意味を見つけることだって、理由をね、はかなさにビンタ食らわす何かを。自分はここにいたって言うために。存在したんだ。いたんだって。たぶんその方法は二つしかない——仕事、それから人との関わり。どれだけ人を変えたか。どれだけ変えてもらったか。どれだけ踏ん張ったか。お互いに。せめて精いっぱいやってみたか。それで花火の美しさは決まる。	7/2